

アメリカ発! 市民のなかに吹く風

～ THE WIND OF AMERICA 9月9日号 ～

日曜日の今日、いつもはせわしないマンハッタンの街もなんだかのんびりムードです。晴れ渡った秋の空、さわやかな風が吹き渡るハドソンリバーの川辺や街角のカフェ。そこかしこで思い思いの休日をすごすニュー Yorker たちの姿は、う～ん、やっぱりカッコイイ!

午前中はマンハッタンの南エリアにあるテナメント（借家）博物館を訪問。自由の国を夢見てこの地にやってきた移民たちの暮らしにしばし思いを馳せました。

そして一行は「グラウンド・ゼロ」へ。誰も口にはしませんでした。このツアーに参加した時から、メンバーみんながそれぞれの思いを胸に抱いて訪れるときを待っていた場所。実際に訪れたその場所で、それぞれどんなことを感じたのでしょうか。

その後、ブルックリン橋を渡ってマンハッタン島のおとなりブルックリン地区の視察へ。そしてニューヨーク最後の自由行動。短い時間でしたが、みな観光、ショッピング、お土産探しなどにマンハッタン中を飛び回り、ニューヨークの日曜日はあっという間に過ぎていきました。（菅野）

テナメント博物館視察

Sunday Morning、人まばらな日曜朝、私たちはNYのオフィス街を歩き、地下鉄に乗って、Lower Manhattan East Side テナメント博物館を視察しました。オーチャードストリート97番街の街角からスタートし、私たち一行のガイド役、アダム・スティンバーグさんの後について歴史的保存地区内のテナメントにてレクチャーを受けました。（テナメントとは、大きな建物のことであり、安い建物という意味を持つアパートメントとは異なります）

テナメントの中では、テナメント建設にまつわるドイツ系移民の歴史と、彼らが住んでいた当時の住居、また、移り変わる市制環境などについて説明を受けました。英語力「a little」の私たちに対し、アダムさんはできる限り解り易い英語、またははっきりとした発音で説明して下さい、彼の優しい人柄を感じました。さらに青山さんから日本語で解説を加えていただき、より深い理解につながりました。

このテナメントは1863年（なんと日本における明治維新前!）に建てられ、建築物に対する制度が厳しくなる約60年まで住居として使用されていました。その後、当時ドイツ系・イタリア系移民として住んでいた子孫の証言を元に再現し、今では当時の暮らしが見学可能となっています。

テナメント博物館は一般的にはあまり知られていないようですが、移民たちの助け合いとコミュニティ、苦しい生活の中で生き抜く力強さを知り、今日もまた1つ学びを得ました。吉田裕華



レンガ造りと外階段。一目で古い建物であることがわかるテナメント。イメー
ジは同潤会アパートといったところでは
ないでしょうか

アメリカ・アメリカ

グラウンド・ゼロ、9月9日。

昔、エリア・カザンの「アメリカ・アメリカ」という映画を観た。貧しいイギリス移民の話だ。アメリカに夢を託した一家。船がニューヨークに着くと、そのファミリーの子どもがアメリカの大地に接吻した。ヘミングウェイ、フォークナー、そしてチャンドラー。15～16歳の頃、アメリカ文学を読み漁った。アメリカは当時の私にとって夢の国だった。しかし時代が私たちを押し流す。安保闘争、ベトナム戦争一。時が経ち、今私はアメリカにいる。そしてグラウンド・ゼロ。アメリカの理想と富の象徴を一瞬で打ち砕いたテロ。アメリカが変貌する。グラウンド・ゼロの前に立った時、21世紀が急カーブした原点に立っていると感じた。私はテロを許さない。そして戦争を許さない。

自由の国、アメリカ・アメリカ。

この巨大な国はそれでも明日の世界を支配し続ける。グラウンド・ゼロに立った後、遠く自由の女神を見た。私の憧れの国であったアメリカはどこに行くのだろうか?

9.11.あの日亡くなられた人々に哀悼の意を捧げる。そしてその後の戦争で命を失った全ての人を悼悼する。

生原勇



明後日に迫った6年目の9月11日を迎えるにあたり、近隣のビルには大きなアメリカ国旗がはためいていた

ニューヨークでの4日間

ニューヨークは観光、ショッピングという視点ではまったく事欠かない街である。

ブロードウェイ、美術館、五番街、セントラルパーク、ハーレム等、それぞれの場所に個別のニューヨークの顔がある。人の多さで言えばタイム・ワーナー・センターや夜のタイムズ・スクウェア周辺はさながら新宿歌舞伎町なみ

の賑わいを見せている。

今回のニューヨーク視察で感じたこと、それはニューオリンズから移動してきたからこそ感じることであるが、街の活気がまったく異なるということにある。ニューオリンズはハリケーンの被災を受け人口が激減したという特殊事情があるものの、日本の地方都市のように人口が減り、一方でニューヨークには東京のように人が溢れている。必ずしも2つの街で比較することは適切ではないのは承知の上で、都会への技術、文化、人口、富の集中を実感したことが一点目である。

二点目は環境の視点で感じたことである。ニューヨークの視察で最初に訪れたのは市環境保護局であった。上下水道の整備という切り口から環境対策にまで話は及んだわけであるが、アメリカの環境保全への施策はどのレベルなのだろうか。京都議定書からの離脱に象徴されるように連邦政府としての意識は必ずしも高くないように思われる。建物、施設内では徹底した禁煙を行っているものの、これに反して路上での喫煙、ポイ捨て、イベント後のゴミの散乱、そして分別管理されないゴミボックス等、これらは総じて環境配慮という思いを感じない。別の見方をすればこれだけの多民族国家では、国民、市民への動機づけ意識づけをすることが極めて困難なのかもしれない。

三点目は平和についてである。9.11 同時多発テロに遭ったワールドトレードセンター。このテロの被害に遭った人、その人を救おうとして亡くなった人は併せて2700人を越える。グラウンド・ゼロの現場と亡くなった人たちのリストを見るとこみ上げてくるものがある。このことを教訓として平和というものをどう考えたらよいであろうか。少なくとも暴力と憎しみの連鎖はどこかで絶たなければならないと感じる。一方でこのグラウンド・ゼロのすぐ脇では、ハドソン川に面した公園で休日家族や友人と過ごす姿が対照的に残っている。テロから6年が経過したこともあり、当然の風景ではあるが、大きな落差を感じた。

いずれにしても、アメリカの社会の姿を実感するにはもっともっと長い時間と調査が必要であろうが、その面でも見る事ができたことは大変有意義であった。

庭野吉也

アテンドと通訳・・・

今回のツアーは佐々木(一)さんの存在なしには語れない。「アメリカへ行こう」という計画は立てたものの、正直「本当に実現するのだろうか？」と半信半疑な部分もあった。通常10人を超えるツアーだったら、旅行社にお願いするのが常識である。しかし佐々木(一)さん曰く「それだけで費用がかさむ」ということで、結果として全て佐々木(一)さんにお願いすることになった。

ホテルの予約から飛行機のチェックイン、また各種トラブルにも対処するなど、さながら添乗員なみの仕事をこなし、訪問先では同時通訳に早変わり。通訳はとても集中力があるのに、私たちの無理な質問もそつなくこなしてくださった。そんな「一人何役」もこなしながらきっちり編集委員としての任も果たし、右も左もわからない私たちのために「おみやげは〇〇がおすすめてですよ、伊藤園のお茶もあります」などまさにかゆいところに手が届くような心配りもしてくれる。

ちょっと「ブーさん」似の佐々木さんから学んだことは、「アメリカでは主張は強く伝えること」。優しい瞳の奥にこんなバイタリティーのある力強さと、本当に彼も心からこの旅の成功に向け、協力してくれているのだなと改めて感じた。佐々木さんには言葉に言い表せないほど感謝している。こんな貴重な方に支えられてこの旅が実現できたことに、本当に嬉しく思う。佐々木さんありがとうございました。東京でまたお会いしましょう。

真島明美



ニューヨークでの移動は基本的に徒歩と地下鉄。4日目にしようやく慣れてきました

日米災害 NPO 交流研修ツアー 9月9日行程

午前 テナメント博物館視察
—アメリカにおける移民の歴史
—周辺地区徒歩視察
グラウンド・ゼロ、ブルックリン地区視察
午後 自由行動



マンハッタン地区とブルックリン地区をむすぶ橋の上で記念の二枚

編集後記

実は、ニューヨークは2度目だった。2001年の「9.11」から遡ること半年前、ニューヨークに数週間滞在していた。

あれから6年。自分の記憶の中のニューヨークと、今回のニューヨークでは同じようで大きな違いを感じる事となった。

6年前は、屋台のホットドッグはほとんどが1ドルだった。6年前は、ハーレム地区は限られた地域以外には行かない方がいいと言われた。6年前は、ワールドトレードセンターのツインタワーが世界一高いビルとして空に突き刺さっていた。

屋台のホットドッグはほとんどが2ドル以上となり、ハーレム地区にも足を踏み入れることが可能となり、ワールドトレードセンターは、「グラウンド・ゼロ」となっていた。

ニューヨークは変わったのかもしれない。

でも変わったのは自分や世界かもしれない。そんなことを思ったニューヨーク4日目でした。(福田)